

菜飯

福井県立武生商業高等学校

笠松 彩夏

ある土曜日の夕方、祖母がご飯を作り始めたので手伝いをしにキッチンへ向かった。鍋を開けるとキッチンにみそのこうばい香りが広がった。その日の夕食は菜飯だった。私の祖母は菜飯を作ると決まって祖父の話をする。

「菜飯はね、おじいちゃんの大好物だったんだよ。」

私の祖父は三十一歳という若さで他界し、その後祖母は二歳の父と生後七カ月の叔父を女手一つで育ててきた。私が生まれた後も共働きの両親にかわり、私達姉妹と従兄妹の四人を育ててくれた。祖母は私達に父の幼い頃や私達が生まれた時の話など、いろいろな話を聞かせてくれた。そんな祖母だが、祖父の話だけはめったに話さなかった。しかし祖母が唯一、自ら祖父の話をする時がある。それは菜飯を食べる時だった。菜飯が祖父の好物だと知っていた私は、菜飯が食卓に出るたびに仏壇にお供えしていた。

しかしその日はいつもと少し違った。祖母が祖父の話をしなかったのだ。物忘れが激しくなった祖母は祖父のことも忘れかけているようだった。祖父の話をしなかったことを少し寂しく思いながらも、出来上がった菜飯を私は仏壇にお供えに行った。その頃の私は、菜飯をお供えしているのが恥ずかしくて、家族にばれないよう、こっそりお供えしていた。

しかし私はその菜飯を朝までおきっぱなしにしてしまった。朝起きると祖母が私に言った。

「おじいちゃんが菜飯好きだったの覚えててくれたんだね。ありがとう。」

私は菜飯をお供えしていたのを知られた照れくささから、ろくに返事もせず、祖母が座っている向かい側に座った。そんな私を気にする様子もなく祖母は懐かしそうに話を続けた。

「あの日、おじいちゃんが亡くなった日も菜飯をたくさん作っておじいちゃんの帰りを持ってただけど、警察から電話がかかってきてね。おじいちゃんが踏み切りで電車と衝突して亡くなったって。お通夜やお葬式が全部終わった後、鍋のふたをあけたらかびでぼこぼこになった菜飯が残っていたんだよ。あの時は食べれなかったけど、彩夏が菜飯をお供えしてくれて、おじいちゃんすごく喜んでると思うよ。」

私は幼い頃から菜飯を食べる日に祖母から祖父の話を聞いてきた。菜飯の他にもラーメンや黄桃なども祖父の好物だったそうだ。幼い頃、なぜ他の好物では祖父の話をしないのだろうと考えたこともあった。しかし祖父の亡くなった時のことを聞き、祖母にとって菜飯は他の祖父の好物よりも意味のあるものだったのだろうと思った。祖父が亡くなった時の話を全て終えた祖母は最後に

「彩夏がお供えしてくれたの見るまで菜飯が好物だったこと忘れてたわ。」

と、言った。笑顔の祖母だが、私には少し寂しそうに見えた。

「私、これからも菜飯お供えするよ、おばあちゃん。」

私は一度も祖父に会ったことがない。だけど菜飯の出る日、祖父の情報が増えていく。私と祖母を祖父の話へと連れて行く、切符のような菜飯。